Ⅱ　リオ五輪をめぐるブラジル報道の背景

日吉　昭彦

1　リオ五輪の概要

リオ五輪とは、2016 年 8 月 5 日から 8 月 21 日までの期間において、リオ・デ・ジャネイロ（以後、リオと表記）を会場として開催された第 31 回夏季五輪のことである[1)]。

前回のロンドン五輪においては、開催地のロンドン以外でも、英国郊外などに複数の競技会場が設けられていたが、リオ五輪の場合は、サッカー以外は、基本的にリオの都市部で開催された。サッカースタジアムについては、サンパウロ等全国に点在していたが、ほとんどの競技はリオで行われている。

南米大陸での五輪開催は本大会が初めてであった。北京五輪は中国初、ロンドン五輪は同都市 3 回開催が初めてと、史上初が続く夏季五輪であるが、今回は、「04、12 年大会への立候補では 1 次選考で敗れたリオ（『朝日新聞』 2009.10.3 朝刊）」が、3 回目の挑戦で勝ち取った南米初開催であった。国際的なスポーツイベントの開催という点では、2014 年にサッカー・ワールドカップもブラジルで開催されており、この二大イベントが連続して同国で開催されたことも話題となった。

リオ五輪の大会スローガンは、「A New World」とされ、ここには「境界を取り除き、他者を尊重し、一体化を進めるという理念」（『毎日新聞』 2016.8.6 夕刊）が込められているという。こうした理念を背景に、LGBT のカップルやサウジアラビアの女性選手の参加など、これまで抑圧的な経験を持ってきた人々が、五輪の舞台に立つことが大きな注目を集めた。国際五輪委員会（以下、IOC：International Olympic Committee）によれば、205 の国内五輪委員会（以下、NOC：National Olympic Committee）と難民選手団、個人参加（IOA ：Individual Olympic Athletes）があった（IOC 2017：8）。難民選手団が初めて参加したことは、大きな話題ともなった。

図表Ⅱ-1 は、1896 年に開催されたアテネ五輪から 2016 年のリオ五輪までの各大会における競技数や参加 NOC 数、選手数、女性選手数およびその割合を整理したものである（IOC 2013：1-8、 IOC 2016 b：12、IOC 2017：1-4）。

競技種目では 306 種目が行われ、参加選手は 11,238 名（IOC 2017：8）で、それぞれ史上最多を塗り替えた。また、図表にはないが、参加した NOC のうちメダルを獲得したのは 87 の国と地域（IOC 2017：14）で、これも史上最多であった。全選手に占める女性選手数の割合も過去最高の 45%を超えている。

図表Ⅱ-1　大会別にみた競技数、参加 NOC 数、参加選手数、女性選手数

	競技数	NOC数	選手数	女性選手数	（割合）
1896　アテネ	43	14	241	0	0.0%
1900　パリ	95	24	997	22	2.2%
1904　セントルイス	91	12	651	6	0.9%
1908　ロンドン	110	22	2,008	37	1.8%
1912　ストックホルム	102	28	2,407	48	2.0%
1920　アントワープ	154	29	2,626	65	2.4%
1924　パリ	126	44	3,089	135	4.4%
1928　アムステルダム	109	46	2,883	277	9.6%
1932　ロサンゼルス	117	37	1,332	126	9.5%
1936　ベルリン	129	49	3,963	331	8.4%
1948　ロンドン	136	59	4,104	390	9.5%
1952　ヘルシンキ	149	69	4,955	519	10.5%
1956　メルボルン	145	67	3,155	364	11.5%
1960　ローマ	150	83	5,338	611	11.5%
1964　東京	163	93	5,151	678	13.2%
1968　メキシコ	172	112	5,516	781	14.2%
1972　ミュンヘン	195	121	7,134	1,059	14.8%
1976　モントリオール	198	92	6,084	1,260	20.7%
1980　モスクワ	203	80	5,179	1,115	21.5%
1984　ロサンゼルス	221	140	6,829	1,566	22.9%
1988　ソウル	237	159	8,391	2,194	26.2%
1992　バルセロナ	257	169	9,356	2,704	28.9%
1996　アトランタ	271	197	10,318	3,512	34.0%
2000　シドニー	300	199	10,651	4,069	38.2%
2004　アテネ	301	201	10,625	4,329	40.7%
2008　北京	302	204	10,942	4,637	42.4%
2012　ロンドン	302	204	10,568	4,676	44.2%
2016　リオ	306	205	11,238	5,059	45.0%
			（人）	（人）	（%）

参考までに、日本五輪委員会（以下、JOC :Japan Olympic Committee）によると、日本の選手団は、601 名（ロンドン五輪は 518 名）で、うち男性選手 174 名、女性選手 164 名、役員 263 名が参加した。ハンドボール以外の全ての競技で日本の選手が出場した（ロンドン五輪では、バスケットボールとハンドボールで出場がなかった）。参加者が多い個人競技は、陸上で 52 名（56：（）内はロンドン、以下同様））、水泳で 61 名（39）、体操で 19 名（19）、柔道で 14 名（14）、セーリングで 11 名（9）などとなっている。また、団体競技では、サッカーに 18 名、ラグビーに 24 名、ホッケーに 16 名、バスケットに 12 名が参加した。メダル獲得数 41 個（金　12 個、銀　8 個、銅　21 個）で、これはロンドン五輪時の 38 個を超えて、過去最高であった。

南米で初めて五輪が開催されたことは、五輪文化に空間的な多様性があることを示しているといえるが、これに加え、出場した国や地域、選手の多様性が重なり合ったリオ五輪は、まさに世界規模で広がりを見せている「ダイバーシティ」という文化的理念の発揚の場ともなったといえるのではなかろうか。東京五輪を前に「ダイバーシティ」の理念を打ち出している日本においても、日本選手の活躍とともに、こうしたリオ五輪の理念が報道された。

こうした五輪に対するブラジルの姿勢は、五輪を国威発揚のメディア・イベントととらえた中国の「ナショナル」重視の姿勢とも、また、「Inspire a Generation」のスローガンで世代を超えて受け継がれる「文化」に訴えた英国の姿勢とも異なるものだろう。

2　リオ五輪をめぐるブラジル報道
～新聞報道についての予備的な内容分析調査

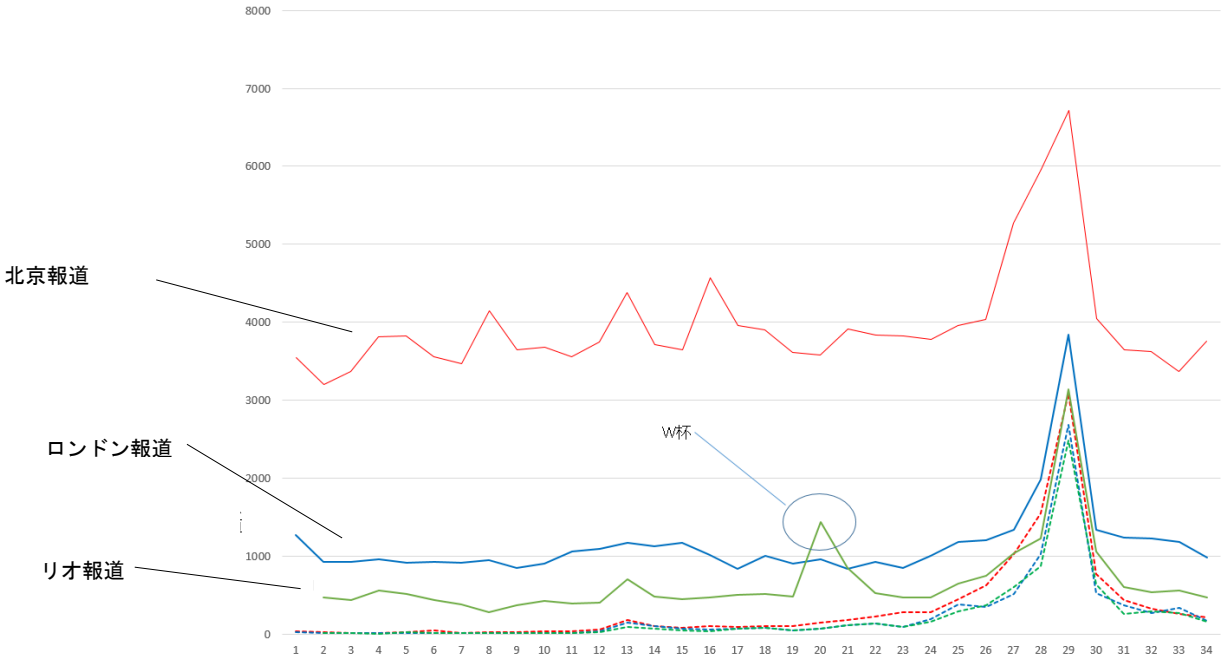
2009 年 10 月 2 日に開催された IOC 総会でリオに開催都市が決定されてから、日本のマス・メディアは、ブラジルやリオに関する出来事、リオ五輪について、どのように報道してきたのであろうか。

本研究会の研究対象は、夜の 7 時以降に放映されている地上波のニュース番組が中心であるが、ここでは新聞記事を事例に、報道の傾向を予備的に分析しておきたい。

これまで、北京五輪とロンドン五輪で同様の記事の内容分析を行ってきた（日吉 2015：11-15）。今回も調査方法を統一して分析を行った。分析方法は、『朝日新聞』の記事データベース [2] から、「ブラジル」および「リオデジャネイロ」というキーワードを含む記事（以下、「ブラジル報道」[3] を抽出した。さらに「リオオリンピック」または「リオ五輪」「リオデジャネイロ五輪」というキーワードを含む記事（以下、「リオ五輪報道」）を抽出した [4]。期間は、IOC 総会で開催都市に決定されてから、五輪が終了した後、一年後までの期間である。比較対象となっている過去の五輪も同様である。

抽出した記事の本数を 3 か月ごとに整理した結果が図表Ⅱ-2 および図表Ⅱ-3 である。

図表Ⅱ-2　新聞の「北京報道」「ロンドン報道」「リオ報道」
および「北京五輪報道」「ロンドン五輪報道」「リオ五輪報道」



全体の傾向としては、「ブラジル報道」は、「中国報道」「英国報道」と比べて少ない傾向にある。ブラジルでサッカー・ワールドカップが開催されていた期間のみ、「ブラジル報道」が「英国報道」より多くなっているが、一時的な傾向であり、おおむね「英国報道」の 3 分の 2 程度の記事量で、「中国報道」の 7 分の 1 程度となっている。

「リオ五輪報道」については、IOC 総会で開催都市に決定されてからしばらくは「北京五輪報道」「ロンドン五輪報道」とほぼ同様の傾向で、開催の約半年前あたりから「北京五輪報道」のケースのみで増加傾向にある。「ロンドン五輪報道」と「リオ五輪報道」はさほど違いがなく、期間によっては「リオ五輪報道」が多いケースも見られている。

五輪開催期間中をみると、中国の場合、五輪開催期間中においても、「北京五輪報道」は「中国報道」の半数程度であり、開催期間中にも中国関係のさまざまなニュースが報道されていることが分かる。一方、ロンドン五輪とリオ五輪の場合、開催期間中はほぼ五輪関連のニュースで占められている。五輪開催期間中は、その他の期間と比べれば、「ブラジル報道」が多い傾向にあるが、五輪開催をきっかけにブラジルの多様なニュースが報道されるようになるような傾向は認められなかった。

図表Ⅱ-3　新聞の開催国報道と五輪報道

年度	北京五輪 記事数	北京・中国 記事数	中国報道中の 五輪報道の割合
2001	38	3542	1.1%
	22	3206	0.7%
2002	16	3370	0.5%
	9	3817	0.2%
	25	3821	0.7%
	43	3556	1.2%
2003	14	3463	0.4%
	21	4142	0.5%
	23	3645	0.6%
	30	3681	0.8%
2004	39	3557	1.1%
	60	3746	1.6%
	182	4383	4.2%
	102	3712	2.7%
2005	80	3643	2.2%
	107	4570	2.3%
	89	3957	2.2%
	98	3902	2.5%
2006	98	3613	2.7%
	143	3575	4.0%
	180	3912	4.6%
	229	3833	6.0%
2007	284	3823	7.4%
	281	3776	7.4%
	449	3953	11.4%
	628	4036	15.6%
2008	1031	5274	19.5%
	1552	5959	26.0%
	3081	6714	45.9%
	772	4048	19.1%
2009	439	3645	12.0%
	329	3627	9.1%
	262	3364	7.8%
	209	3753	5.6%

年	ロンドン五輪 記事数	ロンドン・英国 記事数	英国報道中の 五輪報道の割合
2005	20	1270	1.6%
	8	931	0.9%
2006	17	927	1.8%
	8	959	0.8%
	9	915	1.0%
	10	922	1.1%
2007	14	917	1.5%
	9	944	1.0%
	12	853	1.4%
	11	901	1.2%
2008	18	1057	1.7%
	39	1092	3.6%
	149	1166	12.8%
	104	1125	9.2%
2009	66	1166	5.7%
	57	1014	5.6%
	65	833	7.8%
	82	1006	8.2%
2010	48	908	5.3%
	67	954	7.0%
	114	833	13.7%
	141	926	15.2%
2011	89	851	10.5%
	189	1002	18.9%
	378	1182	32.0%
	348	1199	29.0%
2012	517	1342	38.5%
	1023	1987	51.5%
	2687	3841	70.0%
	526	1340	39.3%
2013	367	1239	29.6%
	269	1222	22.0%
	333	1187	28.1%
	174	980	17.8%

年	リオ五輪 記事数	リオ・ブラジル 記事数	ブラジル報道中の 五輪報道の割合
2009	17	468	3.6%
2010	10	439	2.3%
	3	557	0.5%
	22	509	4.3%
	12	433	2.8%
2011	9	378	2.4%
	12	279	4.3%
	11	374	2.9%
	13	426	3.1%
2012	12	389	3.1%
	20	401	5.0%
	95	700	13.6%
	64	482	13.3%
2013	49	447	11.0%
	40	469	8.5%
	73	504	14.5%
	78	510	15.3%
2014	46	476	9.7%
	71	1436	4.9%
	109	847	12.9%
	133	522	25.5%
2015	94	473	19.9%
	161	474	34.0%
	286	651	43.9%
	372	744	50.0%
2016	605	1035	58.5%
	872	1230	70.9%
	2486	3139	79.2%
	635	1063	59.7%
2017	256	605	42.3%
	292	532	54.9%
	273	559	48.8%
	163	469	34.8%
2018	152	481	31.6%

では、「ブラジル報道」にはどのような記事が多かったのであろうか。五輪開催決定直後の新聞記事を見ると、「治安の悪さ」を中心に、五輪開催環境に関するニュースがしばしば記事となっている。例えば、銃撃事件などのニュースや事故のニュース等である。

サッカーワールドカップと五輪が重なったブラジルでは、開催の意義を問う反対運動が多く行われているが、こうした開催反対運動が社会問題として、しばしば報道されている。まずサッカー・ワールドカップをきっかけに国際的なスポーツイベントの開催についての反対運動が報じられ、五輪についても次第に反対デモなどが加熱していく模様が報じられている。こうした報道は、反対運動の背景として、ブラジルの経済的な不況と政権の不安定化などの要因が報じられ、この期間の典型的な「ブラジル報道」の特徴となっている。特に、五輪直前には、開催反対運動が政治問題化し、大統領弾劾事件にまで発展したことから、国際ニュースの紙面でこうした「ブラジル報道」を見ることも多くなった。

肯定的な記事では、文化的なニュースとしてほぼ例年、「サンバカーニバル」の開催が記事となっている。日伯関係の報道としては、日系人に関する報道（特に国内の日系人に関する報道）も含まれている。また、ブラジルでは初の女性大統領が選ばれたこと（2010.10.31）や、貧困層向け教育対策（2012.8）、同性婚の容認（2013.6.29）など、国際的なスポーツイベントの開催を前に、ダイバーシティをめぐる政策の動向などが伝えられている。2015 年 10 月にはブラジルの先住民族による「五輪」が開催されたことなど、リオ五輪を前に多民族国家であることを示すイベントの開催なども報じられた。

過去の報告書では、「中国報道」は日中間の国際関係や事件、出来事などが如実に報道量に反映することを指摘した。一方、日英関係のように、日本と直接関係するニュースが多いわけではなく、また外交関係が急に冷めるというような出来事もあまりない国家間の関係において、「中国報道」のような大きな報道量の変化は見られず、基本的には五輪開催期間以外では、報道量は一定している。データを比較するなら、「ブラジル報道」は、ほぼ英国と同様のパターンを示しているといえる。ただし、「日系人のニュース」など国内ニュースとともに語られる傾向や、中南米や BRICs など発展途上国の経済ニュースの一部としてブラジルが断片的に取り上げられるケースなども、データには含まれており、ブラジルという言葉があっても、ブラジル中心のニュースが伝わっているとは限らないケースも多い。

3　リオ五輪報道と国際報道のフレーム

本研究会では、五輪を「世界的なスポーツの祭典の報道として捉えるだけでは不十分であり、それ以外のさまざまな要素を含んだ複合的な報道として捉えることが必要」

（中 2008: 4-5）であるとして、五輪開催前後のニュースの傾向と、開催期間中の当該国家に関するスポーツ以外の報道を調査し、その国際報道のフレームの分析を行ってきた。

たとえば、北京五輪のケースでは、五輪報道とともに、環境や人権問題等、中国・国家と関係する問題が強調される傾向にあった。ブラジルのケースでは、どうであろうか。

リオ五輪は、スローガンにこめられた理念とイメージとともに、現代的な「ダイバーシティ」の舞台として開催が決定された。一方、開催決定直後からすぐに「治安の悪い国」で「政治的にはもめている」イメージが報道において強調され、開催までにはその理念と社会の現実の矛盾を示すような報道もしばしば見られた。

「中国報道」「英国報道」では、対外的な周辺国との関係や対内的な国民統合上の課題などが、しばしば取り上げられたが、「ブラジル報道」では、対外的な周辺国との関係は報道であまり目立たず、反開催運動を通じて可視化されたのは構造的な経済格差の現状であったいえる

こうしたなか、五輪の開催とともに、スポーツニュースがほとんどを占めるようになると、五輪の非日常が語られる開催期間には、「ブラジル報道」はポジティブな側面にフレームが移っていく。「日系人による日伯のつながりの強さ」が五輪報道とともに強調される傾向もあった。

過去の報告書では、隣国である「中国報道」が、「しばしば直接的に日本の国益や日本人を巻き込む事件や出来事と関係している分かりやすい問題を扱っている（日吉 2015：16）」ことや、一方で、「英国報道」は、「複雑な利害関係が絡むグローバルな問題を扱いがちであり、その社会事象やトピックは決して分かりやすいとは言えない（日吉 2015：16）」ことを指摘した。そして「東西や善悪などの対立図式で単純化されやすい」分かりやすい出来事が「勝ち負けを伴う競技を語る際に、比較的に容易にコンテクストとして発動されやすい（日吉 2015：16）」ことを述べた。

さらに本プロジェクトの報告書のロンドン編においては、ロンドン五輪は「都市型」の特徴を持つことを指摘した（日吉 2015：7）。また、小林は、ロンドン五輪の開会式前後のテレビ報道の分析から、「ニュースに登場する人物や事象が都市（city）という視点から提示」されていることを指摘し、ロンドン五輪の報道には「シティ・フレーム」というメディア・フレームが存在することを指摘している。こうしたフレームにおいては、「都市の消費文化や、経済、市民、ポピュラー・カルチャー」といった観点の映像が取り上げられやすく、またこうした文脈で語られるという（小林 2015：96）。

リオ五輪は、開催地だけを考えるならば、ロンドン五輪以上にリオの都市中心部に競技会場が集中しており、ロンドン以上に「都市型」の特徴があるとはいえるが、一方、小林が指摘するような都市あるいはその消費文化をコンテクストとした事象等が、夜のニュース番組をはじめ、さまざまなメディア言説を通じて示されたとは、やや考

えづらく、メディア・フレームについては、別途検討する必要がありそうだ。

また、小林は、ロンドン五輪と北京五輪との比較分析を通じて、北京五輪に見られるような「送り手の中にある当該国のステレオタイプを反映さえたニュースや語り」を生み出すメディア・フレームを「ナショナル・フレーム」としている。リオ五輪を伝える報道は、当該「国」、つまりブラジルのステレオタイプを反映しているとは言えそうだが、国家の威信をかけて中国での初開催とその成功を世界に発信した北京五輪と異なり、むしろロンドン同様、あるいはそれ以上に、開催前・開催期間中を通じて、ブラジル国家は反五輪の運動と国内政治の不安定に揺れ動いた。

ブラジルは、日本からすると地球の裏側であり、空間的にはもっとも遠い国であるわけであるが、南北問題や構造的経済格差の問題が取り上げられる「ブラジル報道」は、ある意味で分かりやすいといえるだろう。「五輪より生活」を訴えた反開催運動のフレームも同様だ。一方、対外的な周辺国との関係では、中南米経済や BRICs 関係の報道はしばしばみられるが、五輪競技報道の増加のなか次第に減少し、周縁化するなかで、こうしたグローバルな国際関係にある複雑さは「ブラジル報道」から見られなくなっていく。こうした「ブラジル報道」の単純化のなか、リオ五輪は、むしろピュアな形で世界的なスポーツの祭典として取り上げられたといえるのではなかろうか。

4　ロンドン五輪視聴とメディア

図表Ⅱ-4 は、IOC による五輪放送関係のデータを整理したものである（IOC 2020：26-27）。競技中継時間は、ロンドンの 5,600 時間から 7,100 時間と大幅に増えている。それに伴い放映権料収入も増加している。

全体的には、テレビで五輪を視聴した人の人数は増加している（IOC 2012：4、IOC 2016：5）。一方、ネットによる視聴も増加傾向で、ネット映像の放映回数はロンドン五輪から倍増している（IOC 2016 a：2）。チャンネルの限られたテレビから、ネット中継量が増加したことが、競技中継時間の増加につながったといえる。

日本民間放送年鑑によれば、ライブストリーミングや見逃し配信、ハイライトやダイジェストなどは過去の五輪と比較しても各段に多く配信されており、「gorin.jp」では 2,500 時間のライブストリーミング、2,000 本以上のハイライト動画などが配信された。NHK も 720 本のライブストリーミングが 2,513 時間分、配信されたという（日本民間放送連盟 2017:20）。

ただし、五輪はテレビで、という傾向に大きな変化がみられているわけではなく、本研究会で行っているテレビニュース研究も、こうしたデータのもと、一定のオーディエンス研究に寄与できるものと考えている。

図表Ⅱ-4　IOC による五輪放送関係データ

	競技中継時間	放映権料
1988　ソウル	2,572	4億0260万
1992　バルセロナ	2,800	6億3610万
1996　アトランタ	3,000	8億9830万
2000　シドニー	3,500	12億3160万
2004　アテネ	3,800	14億9400万
2008　北京	5,000	17億3900万
2012　ロンドン	5,000	25億6900万
2016　ブラジル	7,100	28億6800万
	（時間）	（ドル）

注

1）サッカー1 次リーグについては期間前の 8 月 3 日から競技が開始されていたが、それ以外は上記の期間で開催された。

2）北京五輪、ロンドン五輪の場合は、『朝日新聞』に加え『読売新聞』も分析対象としたが、新聞間の記事量に大きな差はなく、図表が複雑になるため、『朝日新聞』の記事データに限定して掲載した。

3）北京五輪の場合は、「中国」または「北京」というキーワードを含む記事、ロンドン五輪の場合は、「英国」または「ロンドン」を含む記事である。

4）北京五輪の場合は、「北京オリンピック」または「北京五輪」というキーワードを含む記事、ロンドン五輪の場合は、「ロンドンオリンピック」または「ロンドン五輪」を含む記事である。

参考文献

松本崇雄, 2016,「五輪と広告ビジネスの行方」『GALAC』2016 年 11 月号：28-31.

日本民間放送連盟編, 2017,『日本民間放送年鑑 2017』コーケン出版.

日吉昭彦，2015,「ロンドン五輪をめぐる英国報道の背景」『ロンドン五輪開催期間における日本のテレビニュース報道』, 7-20.

IOC Factsheet :THE GAMES OF THE OLYMPIAD UPDATE - OCTOBER 2013.（2020 年 3 月 20 日取得, https://stillmed.olympic.org/Documents/Reference_documents_Factsheets/The_Olympic_Summer_Games.pdf）.

IOC Factsheet :THE GAMES OF THE OLYMPIAD UPDATE - DECEMBER 2017. （2020 年 3 月 20 日取得,

https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Factsheets-Reference-Documents/Games/OG/Factsheet-The-Games-of-the-Olympiad.pdf）.

IOC GLOBAL BROADCAST AND AUDIENCE REPORT Olympic Games Rio 2016 a. （2020 年 3 月 20 日取得, https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Games/Summer-Games/Games-Rio-2016-Olympic-Games/Media-Guide-for-Rio-2016/Global-Broadcast-and-Audience-Report-Rio-2016.pdf#_ga=2.209430802.1805681646.1584709093-1385879318.1584709093）.

IOC London 2012 Olympic Games Global Broadcast Report. （2020 年 3 月 20 日取得, https://stillmed.olympic.org/Documents/IOC_Marketing/Broadcasting/London_2012_Global_%20Broadcast_Report.pdf）.

IOC Marketing Report Rio 2016 b. （2020 年 3 月 20 日取得, http://touchline.digipage.net/iocmarketing/reportrio2016/1-1）.

IOC OLYMPIC MARKETING FACT FILE 2020 EDITION. （2020 年 3 月 20 日取得, https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Documents/IOC-Marketing-and-Broadcasting-General-Files/Olympic-Marketing-Fact-File.pdf）.